

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

学部の情報教育について - これまでの歩み -

著者	大嶋 良明
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化．論文編
巻	11
ページ	73-85
発行年	2010-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/5145

学部の情報教育について

——これまでの歩み——

大嶋良明

OHSIMA Yoshiaki

●はじめに

筆者は国際文化学部の開設時より情報科目担当として学部教育に携わっており、その後の学部カリキュラム改革の流れの中での情報科目の科目再編、情報科教職課程の開設、文化情報コース開設時のポストン大学での夏期 SA プログラム等に関わった経緯より、2009年2月1日に開催された国際文化学部創設10周年記念シンポジウムにおいて、これまでの学部情報教育について概観し、その変遷を報告する機会を得ました。本稿の文章は、その時の講演内容を加筆修正したものです。

●学部の特色と旧カリキュラムの問題点

大嶋でございます。「国際文化学部の情報教育について」と題してお話をさせていただきます。大きく三つぐらいのトピックを持ってきたのですが、それぞれが15分ぐらいしゃべる内容ですので、全体を15分に入れるのはなかなか難しいのですが、頑張ってみます。このうち、先の二つは、だいたい学部全体のカリキュラムと教育内容についてのお話で、最後のひとつは私個人の学部における教育活動です。

まず第1点、カリキュラム改革ということですが、学部は1999年に

学部開設以来の教育の特色

- 語学教育、情報教育を重視⇒基礎力養成
- SAによる異文化体験

- 文化を学ぶ立場からの国際性
- 分析・受容から編集・情報発信へ

図1

開設して、2003年に大きなカリキュラムの改革、つまり第1期生を卒業させた年度にカリキュラムの改定をしたということです。図1に示したものが学部の開設以来一貫した教育の特色ですが、語学教育と情報教育を重視するということで、これを土台に文化研究に結び付けてゆきます。あるいは国際教養人の養成ということで、基礎力を培うことに力を入れていると、先ほど学部長からもご説明がありましたが、SAによる異文化体験も学部教育の大きな特色です。

ここで我々が考える国際性というのは、文化を学ぶという立場から広い視野で物事を見ていこうということです。情報の分析や文化受容の体験を、いかに自分の中で消化して編集して、それを外に向かって発信していくか、それを学ばせたいということです。

図2は学部開設当初の旧カリキュラムというか、改革前のカリキュラムです。「入門科目」から、「基幹科目」、「専攻科目」というように積み上がっていった、語学の「コミュニケーション科目」と「情報科目」は、本当にスキルトレーニングの科目として、それを横から支えるというようなイメージの絵になっていると思います。ちなみに専攻科目のほうは表象文化情報系列と言語文化情報系列というふうに大きく二つに分かれたような形になっています。

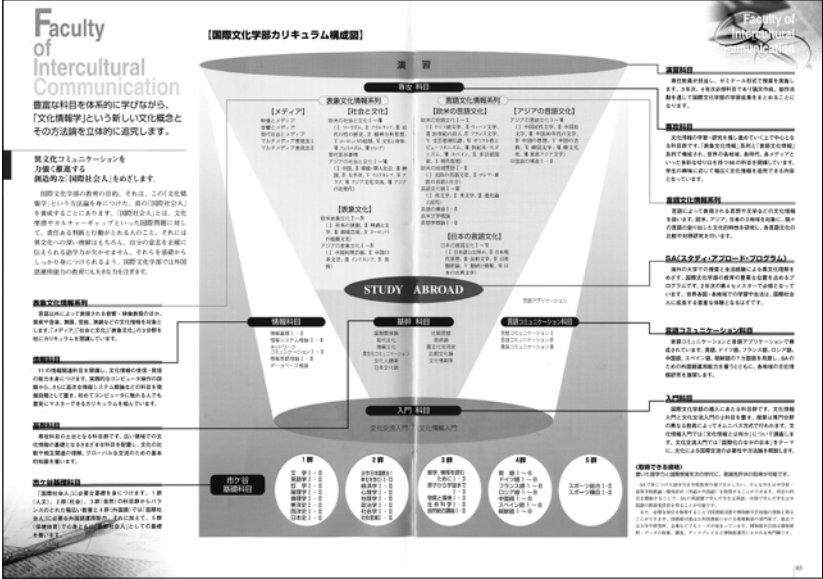


図2

その中から情報科目のカリキュラム体系を抜き出してみると、図3のようなチャートになりますが、これは基礎から専門へということで、矢印は上から下のほうへ流れていっておりますけれども、真ん中に「情報基礎Ⅰ」、「情報基礎Ⅱ」ということでリテラシーの科目を1年次に1年間かけて勉強します。それからネットワークやシステム、そしてマルチメディアというふうに発展していくカリキュラムの設計ですが——これはエクスキューズになりますけれども——これを書いたのは私ではなく、設置準備の早い段階で構想されたものであったようです。現実問題として学部ができるときに、どういう学生さんが来るかということの想定は難しかったわけです。

例えばここでは科目名にローマ数字のⅠとⅡというように科目を区切っておりますが、その当時の単元表やシラバスを見ても、ローマ数字のⅠのついた科目内容は基礎的でしたが、ローマ数字のⅡとい

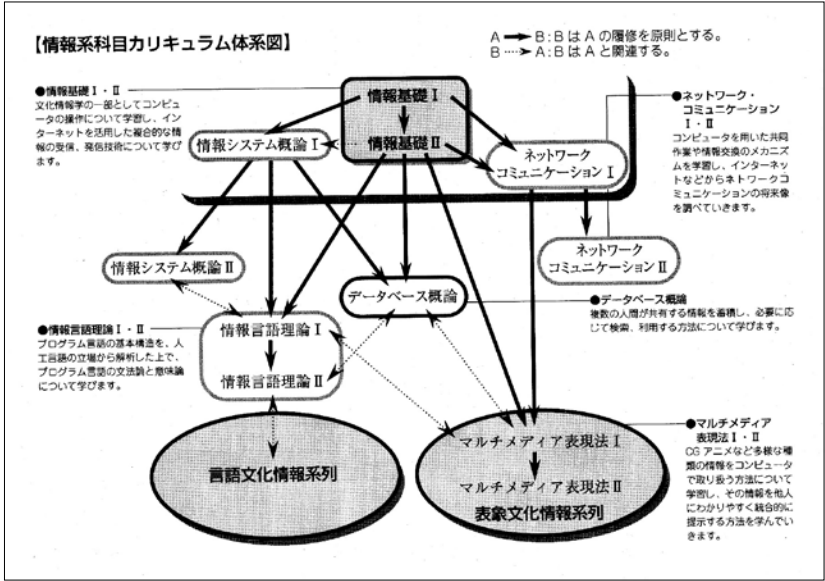


図3

うのは、どちらかというとコンピュータ・サイエンス寄りと言いますか、情報科学を勉強する人がやりそうな方向へ向かっていきます。ですからこの旧カリキュラム体系は一言で言ってしまいますと、コンピュータ・サイエンスの縮刷軽装版ということになるのでしょうか、学びの体系としては、基礎的なところと専門的なところに学習レベルの隔たりがあり、我々の学生さんにとってはなかなか修得しにくいところがあったと思います。

●2003年度新カリキュラムにおける体系化

2003年度にカリキュラムの体系が変わりまして、図4のチャートになります。右側に四つの大きな科目群というふうに分かれていきます。これは、その後の2008年度以降の4コース制の導入によって、専門科

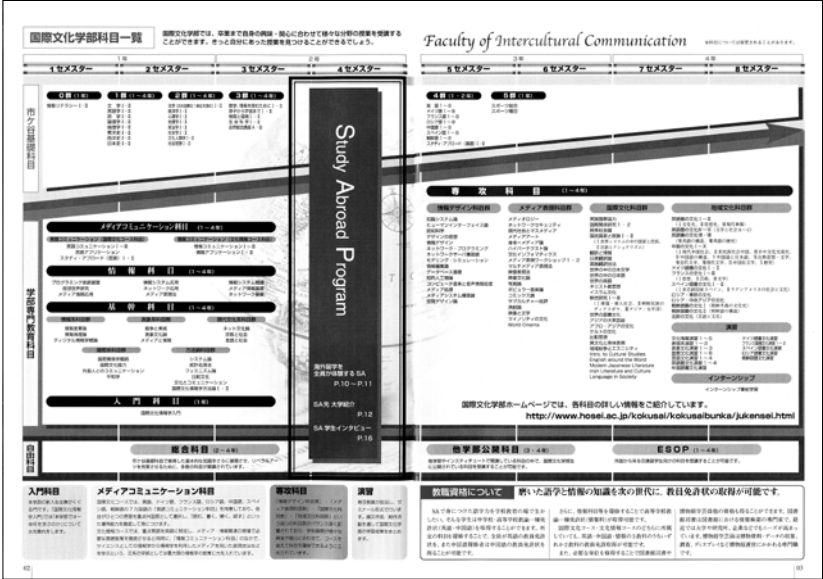


図4

目の学びをよりわかりやすく見せるためのさらなるカリキュラム上の工夫がなされますが、2003年度にすでに——完全には対応してはいないまでも——そういう流れにつながっていく改革が行われたと思います。

左のほうに「入門科目」、そして「基幹科目」、「情報科目」、「コミュニケーション科目」というふうな積み上げが、このブルーのほうで出ております。

最初のカリキュラムで、非常に困難であった「入門科目」をリニューアルしたということと、その専攻科目のこういう色分けに対応させた形で、「基幹科目」がかなり充実したということ、それから先ほどお見せしたような、情報科目の体系が学部の実情にはなかなか馴染まないものがあったので、それを何とか改革しようということだったのです。

この図5にありますように、2003年度カリキュラムでの情報教育の特色としては、まず入門科目の中に「情報」という分野を含めたこと、これは非常に大きかったと思います。それからリテラシーの科目を週1コマで春セメ、秋セメと1年間でやっていたのですけれども、これをスピードアップするということで、週2コマの学習でリテラシー関係を1年次春セメのみで修得できるようにしました。この改革で1年の後期から、いわゆる専門基礎にあたる科目をすべての分野でスタートできるようになりました。ここには書きませんでしたけれども、いわゆるチュートリアルにあたる「基礎演習」科目も、この2003年度カリキュラムから始まったということで、いわゆる「学びの入口部分」を早期に固めることで、それに続く部分では学部をより明確に出していくというカリキュラムの特色だったのではないかと思います。

情報科目に関しては、もっと人間寄りに見ていこうと考えて、コンピュータを使いこなし、ネットワークやマルチメディアを使いこなし

2003カリキュラムでの情報教育の特色

- ☐ 入門科目をリニューアル、情報分野が加わる
- ☐ リテラシ科目を週2コマで1年春セメに
- ☐ システム、ネットワーク、メディアの3分野で基礎力、応用力養成
- ☐ 人間を中心に: 仮想世界、人工物、ネット社会、情報デザインの理論
- ☐ 文化情報コースの開設と夏期SAプログラム
- ☐ 「情報科(高校)」教職プログラムを開設、「英語科」、「中国語科」教職と並立

図5

て、その先に文化研究があるのだと考えます。この考え方にに基づき情報科目と他の関連科目との関係を説明したのが次に示す図6です。まず情報リテラシーをしっかりと、それからコンピュータそのものについて全く知らないわけにはいけませんので、情報システムを学習するのですが、それだけにとどまらずに我々は皆インターネット社会の仕組みを理解し十全に使いこなすということでネットワーク、そして情報編集のためのマルチメディアということで、システム・ネットワーク・メディアというふうな三つの大きな分野を考えて、そこでの基礎から応用へという科目の積み上げを作りました。

その周りにはさらに現代社会に対する視野形成といいますか、それと専門科目の諸分野への接続を目的として、人間を中心に高度情報化した現代社会をとらえなおすために仮想世界や人工物、ネット社会、情報デザインなどの文化の理論を扱う科目を配置したということになっています。これがカリキュラムの特徴です。

それからもう一つ大きな特徴としては、1学部1学科の学部ですけども、その中に国際文化コースと文化情報コースという二つのコースを作りました。これは2008年には廃止になって、今は別のシステムになりましたけれども、その文化情報コースの開設に合わせて、夏休みの1カ月に集中的にSAに行くというプログラムを開発しました。

さらに、従来より英語科と中国語科に関しては、教職免許のプログラムが走っていたわけですけども、これに高等学校情報科の教職プログラムを並立させて、英語の先生と情報科の先生、あるいは中国語の先生と情報科の先生の資格がダブルで取れるようなシステムを作りました。それらを全部飲み込むような形で、このような情報科目の組み立てになりました。

図6のいちばん根元にある5科目というのが学部全体ですから、250名ぐらいの学生さん全員に取っていただきたいというのが履修上の指導方針であり、リテラシーのⅠとⅡを学び、それからシステムの

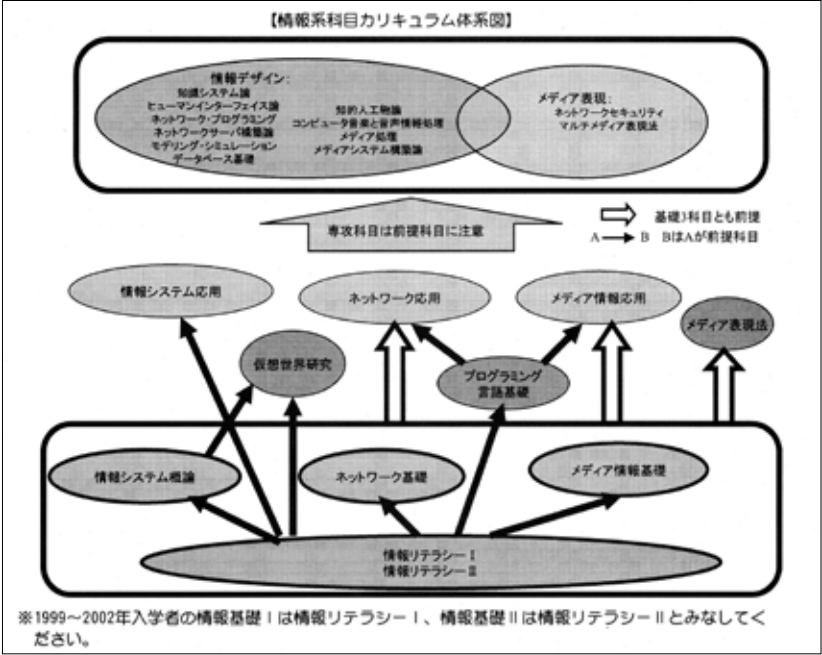


図6

概論、ネットワーク、メディアの基礎という履修順序です。

教職については、今回は詳細な説明の時間がないので、レジユメの冊子の中に刷り込んでおります本学の教職課程表をご参照ください。情報科教職課程の所要単位数は、28単位ですが、国際文化学部のカリキュラムにある情報関係の科目は、ほとんどすべて教職科目の指定を受けておりますので、学年全体が2年の春セメを終わるぐらいまでの間には、情報科教職の学科の3分の1ぐらいの単位が自動的に取れるというシステムになっています。

●文化情報コースと新しいSAプログラム¹

カリキュラムに関しては、他にもお話ししたいことがいくつかあるの

ですけれども、2 番目に SA とからめて情報科目がどのように関わってきたかというお話をしたいと思います。これはカラーで別刷りになっておりますお手許の添付資料²をご覧くださいと思いますけれども、夏期 SA、あるいは短期 SA と言っておりますが、文化情報コースの SA についてお話をします。

これはアメリカでの英語の夏期研修プログラムと、現地環境での文化研究としてのフィールドワークもしくは作品制作を組み合わせたような4週間のプログラムですけれども、学生一人ひとりが日々の活動をブログに記録し、ネット上のビデオ会議で学習成果を報告するなど、プログラム全体を通じてインターネットやマルチメディアを積極的に活用します。2008年度からは学部が四つのコースに分かれて、2003年度カリキュラムでの国際文化コースと文化情報コースという二つのコース制度は廃止されましたので、文化情報コースのために設計した短期プログラムも現在では一般の SA プログラムの一部として運営しております。

ちょっと端折りますけれども、こういうボストンでの4週間プログ

はじめに：文化情報SAとは？

- 2003年度カリキュラムで開設
- ボストン大学CELOP、4週間
- プログラム概要と単位制度
 - 英語研修(SA基礎2単位)
 - フィールドワーク(SA専攻2単位)
- ルームシェアでゲストハウス滞在
- 文化情報コース専修のプログラム
 - ⇒ 2008年度より一般のSAプログラム化

図7

ラムで、英語の基礎が2単位、そしてフィールドワークが専門で2単位の学習です。短期集中でやるということと、読み書き中心の英語の勉強をしてもらうということ。それから在外環境で、事前にそれぞれ個人が研究テーマ、フィールドワークのテーマを設定して、現地での文化情報の研究に結びつけてもらうということです。

その事前指導の科目としては、学生に市ヶ谷キャンパスでWebベースの情報発信のシステムを立ち上げてもらって、実習テーマを設定して指導するという形でやります。

英語学習の内容は読み書き中心と申しましたけれども、一つは情報関係の既習内容です。うちの学部の学生さんはリテラシー科目や情報系の基礎3科目ですでに教わったことを、もう1回英語で学び直すということをやります。これは無駄なようだけれども、知っていることを英語でもう1回勉強してみると、英語流のものの考え方や用語や表現法の違いに気がつくものです。すでに自分が身につけた知識の中で再確認するということで非常に自信がついて、英語での物事の表現力に結びついていくということです。またボストン大学では、英語の自習・実習環境も非常によく揃っており、コンテンツも整備されています。

専門科目のほうは情報学の実習ですが、現地でネットワークの接続をして、サバイバルスキルと言っておりますけれども、あらゆる手段を使ってインターネットにつながる。そこでリアルタイムに学習内容や日々の生活の気づきを情報発信していくということです。具体的にはホットスポットから接続をして、ビデオ会議やブログの書き込みをおこないます。たまたまボストンはそれに非常に適した環境で、様々なところでインターネットやマルチメディアが使えるということです。

ここにフィールドワークの実施例を紹介しましたがけれども、私の意見では、簡単なことであれば1カ月でも萌芽的な文化研究ができるの

ではないかというふうに提案しておりまして、ピクトグラムや都市景観の定点観測や、それから雑誌の日米比較などということをテーマにいろいろと活動してくれたようです。帰国後、それをまたブログを発表場所として各自にまとめてもらうという、かなり盛りだくさんのプログラムです。

まだいろいろと課題はあるのですが、私自身は立ち上げたという思い入れもあって、これからもなんとかこれを続けていきたいと思っています。

●今後に向けて

——学部と大学院をつなぐ教育研究の仕組みとしての情報メディア

最後は私個人の教育活動ですので、かいつまんでご紹介いたしますが、まず図8にありますように、2004年度に学部学会誌を情報というテーマで編集する機会をいただきました。そこでは学部内外の研究者



図8



图9

より寄稿を賜り、私自身は芸術担当の司修先生に芸術と情報をめぐるインタビューをお願いしたり、学部の中でのコンピュータや情報学と、文化研究あるいは芸術表現をさまざまな形で結びつけることなどを試みております。2007年度からは国際交流センターにおいて、留学生向けの講義科目として、日本のネット社会を取り扱う科目を立ち上げて英語での授業を担当しています。また大学院での担当が多文化情報空間論ですので、ネット社会を主たる関心領域としてゼミや研究科で関連する科目を担当しております。その実践の一環として、またこれもWeb関係ですが、図9のようにWikiやSNSなどWeb2.0的な環境を使って、学習成果をコンテンツとして集約し、各自の学びを共有できるようにするためにいくつか実験的なことをやっています。それらにつきましましては、学生が暮れの学会に発表したもの³が、またカラーの別刷りでありますので、ご関心ある方はご一読いただければ幸

いです。

最後に本日の発表のまとめといたしましては：

- 2003年度のカリキュラム改革を中心に、学部教育のなかでの情報分野の教育的な役割を概観した
- 文化情報コースSAの学習の仕組みを説明し、その成果を報告した
- 専門教育、留学生プログラム、大学院教育と情報教育との発展的関連を紹介した

このようになろうかと思います。これで私の発表を終わります。ありがとうございました。

注

- 1 本節の詳細については、今年度刊行予定の異文化別冊に所収の拙論「夏期SAにおける文化情報フィールドワークについて」を参照されたい。
- 2 大嶋良明,「文化情報SAにおけるITの活用について」,法政大学国際文化情報学会発表レジュメ(2008).
- 3 小野,小村,瀬野尾,田鍋,「研究室環境におけるWeb2.0的な情報共有について」,法政大学国際文化情報学会ポスター発表レジュメ(2008).